

沖縄島青年の生活空間の分析*

——社会心理学的枠組——

山 梨 大 学

西 平 直 喜**

I 特殊青年心理学と一般青年心理学

我々の青年研究は、「ある時代のある社会の青年」を対象とするものであり、そこで見出されるのは、《これこれの条件下にある青年において》という、特殊な相対的な記述あるいは法則である。

ことに、青年の感傷性・孤独感・幸福感・楽観と悲観・宗教性などのような、大きな分析単位(1)の研究では、資料が得られた地域社会の特殊性をぬきにして数値を理解することは非常に危険である。

青年の心理や言動は、直接に、政治・経済・文化などの社会環境が影響を与え、同時に、歴史的・価値的・主体的な要因も強く作用している。従って、青年心理学では、この両者を統一している《生活空間》という概念(2)こそもつとも適切なのである。

この生活空間の分析によつて、一定の社会(集団)における青年の言動の背景を明らかにし、条件を解明してゆく段階にある青年心理学を特殊青年心理学と呼んで、蒐集した資料を比較し条件の変動によつてどう青年は変つてゆくかを法則としてとらえる段階にある一般青年心理学と区別する。

両者は従来、必ずしも明瞭に自覚されず、時には個別的事例が直ちに普遍的法則のように叙述され、時には条件分析があいまいなままに、都市と農村などが比較考察されることが少なくなかった。

いうまでもなく、特殊——一般の両青年心理学は相互に相対的真理として依存しあい、浸透しあつて、次第により絶対的な真理に接近すべきものである。

強いてわけのなら、ミード(Mead, M.) (3)による Samoa 島の青年の研究は特殊青年心理学の、オースベル(Ausubel, D.) (4)の理論的な青年心理学は一般青年心

理学の典型とみなすことができるであろう。

この論文は、以上のような考えに立つて、「特殊青年心理学はどのように生活空間を調査し分析するのか」という問いに、私なりの解答を出そうとした一つの試論である。

II 生活空間分析の枠組と対象

何回かの山梨県下の学生・農村青年団の調査をとおして、インジュエントリイを作製し、これから、常に分析の規準となる理論的枠組をまとめた。

(1) 理論的枠組は次の6の心理学的要因よりなる。

- A 生活空間の安定度
- B 生活空間の自由度
- C 生活空間における適応の難易度
- D 生活空間における時間的展望の分化度
- E 生活空間の健全度
- F 生活空間の価値の統合度

AからFに向かい次第に、外的社会的要因から内的主

体的要因が強まる。

(2) 分析の対象は、現実には調査しうるまたは文献研究のできる限り、どのような大きさの社会でも集団でもよい。

例えば、安定した資本主義社会(米・英)・安定したまたは安定しつつある社会主義社会(ソ連・中国)・過渡的な不安定な社会(日独佛など)、または地方別県別・大小都市・農山漁村・さらに、一定工場の工員集団・ある村落の青年集団・某大学学生集団・時にはある青年のサークル・ある青年の家庭など。

限られた時間内に、青年の生活空間の特質を把握するという課題をしとげるためには、やや機械的な欠点はあるにしても、なんらかの枠組が必要であることは疑いない。

たまたま1ヶ月余り、沖縄島に滞在する機会を持つことができたので、この枠組に従つて、面接や調査を行なった。以下に、枠組の内容を述べ、おのおのについて例

* Analysis of life-space of adolescents on Okinawa Island—Socio-psychological frame of reference

** by Nishihira, Naoki (Yamanashi University)

示してみる。

Ⅲ 枠組の心理学的要因・項目・内容

A 生活空間の安定度

安定度とは、社会の諸現象が恒常的で、青年の安定感が高いか、または変化しやすく、対立的な要素を含んでおり緊張をおびているかの度合をいう。後述する自由度や適応の難易度と密接に関係しあっている。

具体的には次の諸項目に示される。

(i) 歴史的安定性……(内容) この数年間の戦争や大災害・圧迫や攻撃のうけ方などの歴史的変動。もつと小さな単位の集団については、集団の創設——発展——崩壊などの変動。

(ii) 政治的安定性……政府・有力者・権力の恒常性・政策の一貫性・選挙(人気)の票の分布と動き・信頼感や敵対感情などの力関係が恒常か変りやすいか。集団では、リーダー・メンバー相互の親和対立などによる変動の可能性としてあらわれる。

(iii) 経済的安定性……物価・賃金・税金・生活水準の変動。農業率や工場率・人口の移動。小集団では、メンバーの収入・集団の収支の変動。成員間の経済的な落差の変動など。大企業と小企業の工場を比較すれば明瞭であろう。

(iv) 思想的・倫理的安定性……支配的な倫理やイデオロギーが大きく動揺している社会と殆ど混乱のない社会。終戦直後のわが国・革命前後のソ連中共と英国、大都市のマスコミと農山村のその影響などを比較すれば明らかであろう。

これらの諸項目の客観的な資料から、変動が実際に青年の生活にどのような外的刺激となつているかを分析する。

経済的貧困や政治的圧力や就職難は、他のカテゴリーにまわし、ここでは、恒常性と易変性のみを問題とする点に注意。

以下に沖繩島を例にとつてみよう。

沖繩島は、古くは明・島津藩の圧迫と搾取に苦しみ、沖繩県となつてからも、利益とともに多くの圧迫が加えられた。戦時は本土防衛の最後の拠点として激戦地となり、農地山林漁場は荒らされ、民家は焼失し、文化財を失い、軍民30万が戦死している。終戦後は、島の戦略的利点から全島を基地化され異民族の軍政下にある。

このような歴史的不安定性は、島の経済・文化・島民の社会的性格の深い要因となつて作用している。

さらに政治経済的にも、軍政と植民地的な多くの矛

盾があり、那覇市長選挙に見られるように青年層は完全に反軍政的になるという事実がいたるところにあらわれている。

このように政治的安定性を欠いているとともに、経済的にも基地経済(生産30%, 消費70%, 輸入 110億B円・輸出20億B円)という変態的経済であり、不安定な軍票を使用している。(B円は1\$=120B円、日本円の3倍)

物価もふろ代・豆腐・野菜など本土の1.5倍から2倍、賃金は一般に低く税金は高く、島民のかかなりの数が、「食べてゆくのがやつと」という状態である。

ことにこのような小さな島国での戦争による経済的変動は大きく、北部の山村地区は山林の収益が激減し中部はその耕地の大部分を軍に接収され、青年は農林学校卒業生すら2割しか農業に従事できない。離島の場合は、中学卒業の7割と高校卒業の8割、計16,000人が潜在的失業者となつてしまつてゐる。

さらに、軍に勤めるか民間に勤めるかによつて、青年の初任給や賃金も非常に大きな差を生じ、不安定な経済状態が勤労青少年にも反映していることが面接によつて明らかとなつた。

なお、社会補償制度や災害健康保険制度・恩給制度などがほとんど実施されていないことも、不安定性を高めている。

思想・倫理的には必ずしも急激な変動は見られず、ことに左翼系の思想は、書籍類も店頭には見られずほとんど《社会的な力》にはなつていないようにおもわれた。

以上の諸点から、外的条件としての沖繩島社会は、青年の安定感を阻害する諸要因を含んでいると結論づけられる。

(文献資料によれば、ソ連や英国社会は、政治・経済・思想的に変動が少ないという意味でかなり安定度が高いといふことができる。)

B 生活空間の自由度

次に自由度とは、生活空間の各領域への移動が、どの程度容易であるか、またその禁止——自由の領域間の障壁は明確であるか否か、青年の《努力》がどれだけ現実的な効果をあげることが可能かを意味する。

具体的な項目として次の6項目をあげる。

(i) 法的自由……身分保証(ある集団からの追放や除名が容易には行われない)・合理的な理由なしに罰や危害を受けない・個人の権利が明らかであり、同時に義務も明確にされている。義理とか「名」とか恥^{はじ}というような形式的・非合理的な道徳や不文律の法律規則に拘束さ

れない。

(ii) 経済的自由……労働に対し適切な報酬を受ける欲求を満たすに足る収入（小遣や奨学金など）を与えられる。

(iii) 時間的自由……労働時間の過剰や過度の疲労・課題や目標のための過度の緊張や労働によつて、欲求を満たすに足る余暇がない青年が少ない。

農村の青年・受験勉強中の青年・工員や女中奉公している勤労青年。

(iv) 思想的自由……イデオロギー（殊に左翼系の思想）に対して、なんらかの圧力が加えられているか否か書店での書籍の売れ方・思想雑誌・サークル活動に対する官憲（又は有力者・指導者）の調査や干渉の有無。これは、青年にとって非常に重要な問題であり、たいは性やニヒリズムもこの「自由」と密接に関連している。

(v) 施設の自由……欲求を満たすための公共施設や個人的な器具が与えられているか。我々はこの場合、青年の現に持っている欲求に対応する施設や器具をことに重視する。

例えば、映画館・本屋・図書館・スポーツの施設・楽器・農具 など。時には指導してくれる人や助言者。

(vi) 社会人の禁止と自由……社会人・教師・上役・両親の青年観や嫉に対する態度、干渉や圧力などで、具体的には次のことを含む。

小遣の使用・喫煙飲酒・夜遅くの帰宅・男女交際の自由・性的解放の程度・叱責罰則の程度・物事をする際の青年の自治や自主性を重んずる程度・進路決定への干渉・責任や義務を強要する程度・青年に依存する程度。

この自由度の分析にあたっては、特に形式的な自由と実質的な自由を峻別することが重要である。

以下に沖縄青年の生活空間の自由度を考察してみよう。

プライス勧告の、「沖縄における我々の使命は、戦略的なものであり、結局この使命とそれから由来する軍事的必要性が優先せざるを得ない」「軍事占領に支障をきたさないかぎり……琉球人民に自由を……」という表現にせめられるように、潜在主権は日本にあるとは言え、国家的な身分保証を奪われている。

《とられ損・ひかれ損・射たれ損》という語によく示されているこの自由の限界が不明確だということは、青年の生活空間にもはつきり反映している。

米軍基地に働くある青年は、「実際、いつどうい理由で首になるかわからないのが一番不安です」と訴えている。

最高学府琉球大学も例外でなく、米国M大学の教授

団が学内に入りこんでおり、学生運動や思想傾向に干渉していると言われる。また、青年団活動なども、就職条件や勤務先での圧力がかなり加えられており、革新的な発言や読書は、かなり自由領域が狭められている。

経済的な面での自由領域も、後述する就職事情と関連して決して広くない。娯楽設備も中心都市の繁華街に集中し、多くの青年は、金銭上・時間上享受できないでいる。北部の青年は、仕ごとを終えてからバスで1時間以上かかる町（辺土名）まで行き、午後8時から11時までの映画を見て、真夜半に帰宅すると報告されている。南部の農村青年や離島の青年においても、多くの接近不可能な領域を持つている。

社会人の青年観などは次のCにおいて詳述するが、閉鎖的な島という特殊な条件を考慮するなら、実質的な自由はかなり限定されていると考えざるを得ない。

これらの分析から、沖縄島青年の生活空間の自由度はかなり低いと結論づけられる。

C 適応の難易度

青年が現実社会に適応することの難易は、その社会（集団）の経済的条件とともに人間関係によるところが大きい。すなわち、封建制・伝統や風習・権力機構・与えられる教育や倫理などが青年の個性的発展方向とどのように一致したかは葛藤するかによつてきまる。

ことに、ある下位集団（村落・職場・学校・家庭など）では、その有力者（指導者）のイデオロギーやパーソナリティによつて、難易度は著しく影響を受ける。

例えば、青年が再軍備や天皇制に反対している時、その父親（上役・村の有力者・校長）が賛成なのか反対なのかによつて、青年の言動はかなり変つてくるであろう。

ここでは人間関係を中心として、適応の難易度を決定する。これは青年の生活空間の緊張度のもつとも重要な要因である。

(i) 現行の教育内容……現実社会とあまりへだたつていたり、青年の理想とくい違つたり、社会人や両親の教育に対する関心の程度や、その関心が、青年に「ことなかれ主義」とか「我々を利用することしか考えない」とうけとられる場合には、青年の適応は困難さをます。

(ii) 社会（集団）の年令……社会や集団がつくられてからの年数、および成員層の年令によつて、若い社会と老衰期の社会（集団）とがある。

例えばわが国の明治・大正・昭和ととつてみると代議士の年令構成は、30才以下が減少し60才以上が増加してい、新中国のような社会では20才代の村長や工場長が多く、いたる所に新しい工場や学校が建設されてい

るようである。

いうまでもなく若い社会(集団)は青年にとって適応が容易である。

(iii) 世代間の思想的相剋……社会(集団)の特殊な変動によつて、二つの世代が思想・倫理・行動様式で真正面から対立する場合がある。戦後のわが国などはもつとも激しい矛盾を含んでおり適応は非常に困難である。

いうまでもなくどの社会でも新旧世代間の矛盾は見出される。(5) ただこの矛盾が、敵対的矛盾であるか非敵対的であるかが問題である。

(iv) 権力者のパーソナリティ……ことに青年に対する専制的——民主的態度・理想的浪漫的か現実的打算的であるかなどによつて、青年の適応の難易度は異なる。

尊敬人物や英雄崇拜に見られるように、同一視の機制が働く場合はもつとも容易である。

(v) 性別による差別待遇……女子の適応の難易度は、その社会(集団)の性的役割に依存している。女子の進学率・就職率・職場での差別待遇・発言権・一般的な男尊女卑の枠組の有無など。

ちなみに、現在の教員養成学部での女子の就職難などは、女子の適応を著しく困難なものにしている。

これらの諸項目は、その社会(集団)の保守度——革新度の対立の程度によつて総括することができる。青年集団は革新度が高いからである。

沖縄の社会の特色は、どの村落も学校も集団も戦後に再建され、成員も建築物も施設もすべて新しく《若い社会》としての、柔軟な発展的な、ある面では未熟な諸特性を持つている点にある。

しかし一面では、戦争によつて三十才代の中堅層を失っており、一つの断層がある。(教員の年令分布など)したがつて戦前派と戦後派が戦中派という中間層なしに接触している。

両者は、反米・祖国復帰・そのための教育水準を本土と同程度に向上させる・島の経済発展などの、いわば民族感情の点で統一されており、この点で青年の適応は容易である。反米的な行動で離職した青年にも、「みんなで助けているし、有力者から経済的な援助を受けたりする」といわれる。

教育は、《教育布令》にもとづき完全な軍政の管理下にあり、教職員は組合を結成することも許されず、1年契約の不安定な地位にあるが、一般に社会人を含めて強い関心を持つており、後述のように生徒も歴史的な使命感を強く持つていた。

しかし、社会主義・封建制・天皇制・国家意識などでは年令層によつてかなり対立的である。選挙の票も

ほとんどの青年がもつとも左翼的革新的な人民党支持であり、青年との面接や教員の集会においても、老人や権力者の権威主義や形式主義・迷信や因習に対する手きびしい批判が聞かれた。

女子青年の場合は、家族制度的な封建的感情の残滓によつてなお多くの矛盾が加わつており、言動の消極性・宿命観・人間関係への不当な過敏性などがあらわれていた。(筆者の調べた範囲では、山梨県下の農村とほぼ同程度またはやや上まわる程度)

しかし一部の青年団では、《女子の地位向上》が運動方針としてとりあげられ、かなり活発化しつつあった。

沖縄青少年の生活空間における適応の難易度は、植民地的基地的な矛盾と、後進性・封建性という矛盾の二種の矛盾から構成されており、本土の青少年のそれと質的に異なつたものであり、一般に適応は困難であると結論できる。

元来、《適応》という概念そのものが、安定した先進資本主義国の社会から発生したものであり、現在の日本青年の場合、適応が倫理や生活の原理とはなり得ないのである。

D 生活空間の時間的展望の分化度

青年の生活空間の特質は、時間的展望が分化し、「時間・価値・未来・歴史・可能性と必然性」などが問題となる点にある。

ここではことに、《未来》に対する分化度と内容を取りあげる。

(i) その社会(集団)の進学・就職の状況。これはもつとも重要な要因であり、筆者の調査結果によつても、就職の可能性が多くの他の事に対する態度に強く影響を与えている。

なお、結婚の可能性(社会心理的なレディネス)も生活空間を規定する大きな要因となつている。アメリカで男子22才・女子20才以下という平均結婚年令は、《青年後期》の意味と内容を全く変えてしまうものと考えてよい。

(ii) 社会的移動の可能性……社会が人材を求めている・封建的な階層化があまり明確でなく移動しうる・努力によつて社会的に出世しうる・自分の希望する職業につけ、希望する生活ができる可能性があるなど。

農村の次・三男や不況時の農村女子青年などと、工業技術者の需要の多い場合の工学部学生などの時間的展望を比較すれば明らかであろう。

(iii) 社会(集団)の将来性……その領域の発展性・産業や貿易の将来性・集団内の地位上昇の可能性(正社員

になりうるとか、次第に発言権を持つ可能性があるなど)

(iv) 未来の事象に対する楽観——悲観……客観的な予測とは別に、青年の持つ未来に対する感じ。例えば死亡率とか道路の整備とか天気予報の当る率とか、汚職の減少などへの予測。(態度測定による)

(v) 未来に対して持つ不安・幸福感……過去・現在・未来に対して持つ不安・幸福感の内容と程度・それを阻害している原因・時間的展望の現実性・拡がり・分化度。

沖縄島の青年について考察してみよう。沖縄では、(数字についてのみ言えば) 高校生の大学進学率は本土の $\frac{1}{2}$ であり、高校に進む率も全中学生の約40%にすぎない。

現在の就職状況は、産業貿易の不振と中小企業の少ないためにかなりせめられており、基地関係を除くと非常に困難である。

進学組でない高校年の女子生徒との面接でも、半歳後の卒業後の方針はほとんど未定であり、「米軍のハウスのメイドにでもなれば1,500円から1,800円ぐらい(B円)もらえて、一番収入はいい」と答えていた。

普通高校卒業生は、49%は就職し、20%が進学するが、進学も就職もせぬ青年が32%もしている。(1956・5月琉球政府文教局調べ)

多くの青年(高校生も青年団の青年も)本土へ留学・渡航することに非常に大きな希望を持っており、現に社会的地位の獲得のためのもつとも容易簡便な方法と目されている。何度となく、《努力さえすれば、ある程度の社会的な地位を得ることができると思うか?》という問いを出したが、いずれも肯定的であつた。

青年の態度測定によれば、山梨県の学生・青年団員・勤労青年と比べて、ごく僅か未来に対する希望の楽観的態度があらわれている。(楽観をO悲観をPとし $\frac{O}{P}$ を指数とすると、山梨大 1.06—琉球大 1.22 人数はそれぞれ 150・105人)

E 生活空間の健全度

社会で見出される諸事象を、青年にとって健全な刺激(条件)であるか不健全な刺激であるかという見地から分析する。

例えば《太陽族》という流行語と服装・思考・行動は、東京都と甲府市と農村とでは異なつた意味を持っているのである。従つて、東京都での太陽族批判の論調は、農村の太陽族の青年にはまったく当てはまらないことを知っている。つまりその事象の青年心理学的な意味(健全度)が問われねばならない。

(i) 社会(集団)での流行……映画・スポーツ・読書・スタイル・流行歌・感情表現や物の言い方など、社会での支配的な現象が、健全なものであるか否か。

(ii) 青年集団……青年団やサークル活動の現状。人数とその拡がり・活動目標や活発性・指導者幹部の実力と人間関係・団結性・阻害又は分裂させている要因。外部の圧力など。

例えば、太陽族的集団やうた声のサークル・読書会や演劇グループなどを、青年の生活空間という視点から分析する。

(iii) 非行・犯罪・異常問題……一般的な不安・フラストレーション・犯罪や退行集団・目立たないがたいはいの破壊的な言動・家出や自殺など。現在の青年の「ドライ——ウエット」という感情や思考の枠組・性や恋愛に対する態度の健全さ。

(iv) 社会(集団)の成員に共通な社会的性格……フロムの意味での社会条件によつて生じた、特有の欲求や反応のしかた・人間関係や社会に対するオリエンテーション。閉鎖性—解放性・Uタイプ—Gタイプ・農村性—都会性・進歩性—保守性・民主性—権威性・共通の劣等感・一定目標への憎悪や攻撃性・愛情の表現・人間関係の諸特性など。これらが、青年のパーソナリティ形成に対し健全な刺激であるか不健全なものであるかを追求する。

以下に、沖縄島の健全度を考察してみよう。

沖縄島の「流行」現象は、本土のマスコミの影響を受けて発生し発達しているので、時間的にずれがあるだけで本質的には大差はない。

しかし、都市、殊に中部の基地街は社会的雰囲気は、ジャズ音楽・バー・質屋・特殊婦人・G Iの姿など、どぎつい植民地的色彩にいろどられており、かなり不健全である。一方農山村部や離島は流行も遅く、一般文化水準も低い後進性をあらわしている。

映画・流行歌・クイズばやり・ジャズ音楽などの流行の内容も、この植民地性と後進性の二つの特質を含んだものであると結論しうる。

しかし一方、青年集団(沖縄連合青年団)⁽⁹⁾は日本青年団協議会にも加盟し、幹部研修会・青年学級の推進・共同学習や生活記録運動の促進・各種機関紙の発行・球技大会・レクリエーション・うた声運動など、活発化しはじめたところである。ここでも、民族意識や課題意識がはつきりしている点と、閉鎖的な地域社会特有の葛藤が激化しやすい点が指摘される。

この反面、青少年犯罪・性的問題・たいはい的非行青少年は著しく上昇しており、本土と同様に、健全な

《うた声グループ》と不健全な《太陽族グループ》の2群に分裂しつつあり、対立があざやかになつてきている。

いうまでもなく、前述の社会的不安定性や自由度の狭小さによつて、社会共通の不安定性やある種の不安が見られ、態度測定の結果によつても、沖縄の青年は本土の青年に比べ人間関係が孤立型（I型）が多く、又感傷性もごく僅か高い。

ことに明瞭に指摘されるのは、この地域社会が歴史一社会的に生んだ特殊な《社会的性格》である。これを調査や面接の結果次の3群にまとめた。

a レヴィンのいうGタイプの性格……これは「守礼の邦」・「真玉橋伝説」（人より先に口をひらくな）などにあらわされる内向性・消極性・きまじめさ・謙虚さ・用心深さなどをしめす。要するに障壁が周辺層にあるのである。（歴史的不安定）

b 親近性……人なつこさ・南国的な情熱性・お人よし・ある種のひょうきんさ・音楽と踊り好き。（閉鎖的島国・気候）

c 南国的無気力性……言動のスロモーション・無気力な生活態度・人生や社会に対する退行的オリエンテーション（気候・風土・歴史）

このa bは本土でも農村人的性格として見られるものである。

しかし、青年は、かなり解放的であり、積極的であり、次第に民主的な健全な諸特性が発達しつつあるということが、面接や調査によつて結論づけられる。

F 生活空間の価値の統合度

地域社会（または集団）の歴史的状况と文化様式は、次代をになう青年に何かを求め期待している。客観的には社会的要求となり、主体的には歴史的使命感として青年に認知される。

具体的には次の諸項目を含む。

(i) その社会（集団）の根本矛盾……それにとまなう、支配的な倫理・価値感・イデオロギー・宗教性。その統合と分裂の度合。

封建性とか植民地的矛盾とか・後進国的矛盾・閉鎖社会の矛盾などと、それから派生された、服従・諦め・節約・義理など形式的な《閉じた道徳》と、抵抗の倫理・ヒューマニズム倫理などの《開いた道徳》・宗教制度・迷信・宗教的心情など。

(ii) 青年への社会人の期待……常に、社会人（指導者）は多くの期待を青年に持つ。忠君愛国的な青年や、革新的青年・生産的青年など。

この社会的要求が明確であり統一されている程、青年

の価値は統合しやすい。（軍国主義・ナチズム・革命期の青年）

(iii) 青年自身の使命感……神に対する宗教的使命感（恩寵・奉仕）や、民族・祖国に対する歴史的使命感（独立・革命）など。時には、科学的・芸術的な使命感ともなり、村づくりや一集団の発展ということへの情熱ともなる。

このような使命感は、青年に理想主義的要素を附与し人生観や世界観の形で価値の統合を可能にする。

宗教性・理想性と虚無性・価値感などは、態度測定と調査によつて客観化する。

次に沖縄島の例をあげてみよう。

この社会は一つの根本矛盾・古くからの風習や迷信・祖先崇拝的な民族宗教などが根強く、閉鎖的・封建的な矛盾が、十分に解決されずに残されたまま、戦後の米軍政下に入り、文化と物質面の影響と、圧力とその抵抗力という植民地的矛盾が課せられた。

従つて、青年は、もつとも革新的反米的集団となり民族感情がかなり高まつている。

元来、閉鎖的な島国であり、この歴史的条件によつて、中学生もすでに歴史的使命を体験している。中学生・高校生の尊敬人物の調査(6)でも、島の政治家や教育指導者が上位にあげられ、一中学生は、「ぼくたち沖縄の青年としてどう生きていつたらよいでしょうか？」という質問をし、これが少しも浮き上つて感じられない（G中学3年生）、またある高校生は、個人的な幸福と島の幸福とが一致しないというなやみを訴えている。（F高校女子3年生）

宗教性は、約70～80%が否定的であり、無関心な青年が多く、キリスト教が次第に入り込んでいる。一部には「生長の家」や、特殊な新興宗教・迷信があるが青年は一般に批判的であつた。

しかし、国家主義や天皇制（日の丸・君が代・天皇・日本国籍）に対しては、戦前のような無批判性が見出される。

文化的にはなお未分化・未成熟・直移入であり、本土の青年に比べ価値の分裂感・それにとまなう不安やニヒリスティックな反応も強烈ではなかつた。

ちなみに、理想的人生肯定的——虚無的人生否定的態度を比較すると、本土（山梨県）青年群と沖縄青年群の各問の分配曲線は非常によく似ている。

しかし、人の和（愛しあふ・利己主義）・孤独の問題などにはかなり明らかな肯定的態度があらわれている反面、生きていることの喜び、人生のわずらわしさなどの点で否定的な態度が見出されている。

Ⅲ 総 括

上述の六つの心理学的要因の各項目は、具体的なカテゴリーによつて客観的に調査測定することができる。各項目の特質から要因を見出し、最後に、その社会(集団)が青年に対して持つ生活空間としての全体的意味を結論として導き出す。

その社会(集団)の持つ根本的矛盾・特権・青年の地位と役割・青年の使命感・生活課題など。

沖縄の場合に例をとれば、以上の分析から沖縄青年の生活空間は、封建性と植民地性の二つの矛盾を持ち多くの面できわめて生活し生長しにくい諸特性を持っていると結論しうる。

しかし、「本土復帰までに教育文化水準を本土の水準にまでひき上げよう」「なんとかして産業を開発しよう」「我々青年の手でこの島の未来を築こう」という歴史的使命感と社会の期待は強く多くの青年の言動に浸透している。

× × ×

この分析の理論的枠組は、青年心理学の方法論として、

- (a) どのようにして一定社会(集団)の具体的資料を蒐集することができるか。
- (b) 何と何が交互に依存しあい、何がもつとも重要な要因であるか。
- (c) それらは、どのような概念によつて青年心理学的な抽象に高めることができるか。

などをとり扱つたものである。

従つて我々は、さらに現実社会(集団)に適用し、あらゆる青年にとつての可能性を検討し、理想的人間像を見出し、青年教育的な本質的課題を探究して、教育実践

の中でこれを検討してゆく第三の段階が残されているのである。

最後に、筆者がもつとも恐れるのは、これが機械的形式的な Social-survey のように使われることである。

典型をつかまえ、その社会(集団)の条件を分析することによつて、全般的な法則を見出そうとすることこそ、特殊青年心理学的認識だからである。

調査や面接に心よく応じてくれた沖縄青少年延べ 4,000 人の諸君と、琉球政府文教局・琉球大学普及部・各学校の先生方、および琉球大の文沢義永先生に厚く感謝いたします。

文 献

- (1) 西平直喜：青年心理学における定量化の方法論的吟味 山梨大学研究報告 第6号 1955.
- (2) Lewin, K. : *Field theory and experiment in social psychology*. Harper Brothers. Co. 1928.
- (3) Mead, M. : *Coming of age in Samoa*. A Mentor Book, 1928.
- (4) Ausubel, D. : *Theory and problems of adolescent psychology*. Grune & Stratton Co., 1953.
- (5) リースマン D : 見出された世代 アメリカーナ 3巻5号
- (6) 文沢義永：沖縄青少年心理研究 第2集, 1957.
- (7) 文沢義永：沖縄青少年心理研究 第3集, 1957.
- (8) 琉球政府文教局：諸調査印刷物 1956.
- (9) 沖縄青年連合会：昭和32年度運動方針
- (10) 饒平名智太郎：沖縄 三一書房 1957.
- (11) 沖縄タイムス社編：新郷土地図画報 1957.

(1957年11月26日受稿)